

上方工房の生産活動

馬淵 一輝

はじめに

後漢代に製作された銅鏡には、「尚方」・「青盖」などの工房名や「袁氏」・「劉氏」などの工人名が記された製品があり、「上方」も工房名の一つとみられる。そのうち、銘文の冒頭が「上方乍竟…」ではじまる獣帯鏡の一群は、獣像表現や外区紋様にまとまりがみえることから上方作系獣帯鏡と呼ばれ、2世紀後半に華北東部地域で作られたと考えられている。この鏡は日本列島における出土分布をめぐり、古墳研究者に盛んに議論されてきた。争点について大まかにいえば、流通に当時の畿内勢力が関与しているか否かであり、卑弥呼の鏡の候補として知られる画紋帯神獣鏡と結びついた重要な議論といえる。この問題を解決するために、上方作系獣帯鏡そのものを型式学的に研究する試みもみられたが未だ定説をみない。

これまでの上方作系獣帯鏡の研究は日本列島における分布の解釈に囚われ過ぎている感があり、一度、こうした政治史の解明を目的とした研究から距離をおいてみる必要があると考える。したがって、本稿では古墳研究の一環としてではなく、「上方」という製作者集団の活動変遷に着目してみたい。近年では、製作者に主眼を置いた研究が進展しており、製作者の移動や製作する鏡式の変化なども復元されている。上方作系獣帯鏡以外にも上方銘をもつ鏡が存在しており、同じ集団の製品か否か注目され、先の問題を解決する手掛かりにもなり得る。これら上方銘をもつ鏡を総合的に分析し、銅鏡の製作者である「上方」という集団がどのような作鏡活動をおこなっていたか検討することで、当時の銅鏡生産の一形態を提示し、なぜこれらの鏡が作られたのか考察してみたい。

一 上方作系獣帯鏡の問題と本稿の指針

上方作系獣帯鏡とは 上方作系獣帯鏡は1990年代に岡村秀典によって、はじめて名称や定義が設定された鏡式であり、まだ研究は浅い [岡村1992]。画像鏡や神獣鏡のように西王母などの神像を配置せず、比較的幅の狭い内区に獣像や仙人などの図像を置いた獣帯鏡に分類される。江南地域から出土するような漢鏡5期までの浮彫式獣帯鏡は図像に輪郭線をもつが、上方作系獣帯鏡は輪郭線をもたないことが大きな特徴である [岡村1992]。「上方」は官営工房である「尚方」の仮借とされ、一人の名称ではなく複数人所属した工房名であり、上方銘をもつほかの鏡式の存在をふまえるとより多くの製作者がかかわっていたと想定できる。なお、上方作系獣帯鏡の製作地は華北東部地域に、製作年代は漢鏡7期第1段階に位置づけられている [岡村1992・1999ほか]。

画紋帯神獣鏡との分布をめぐって 上方作系獣帯鏡は日本列島の広範から出土するが、画紋帯神獣鏡は畿内地域に集中する (図1)。この2種類の鏡の分布の違いは、岡村によって鏡式の抽出

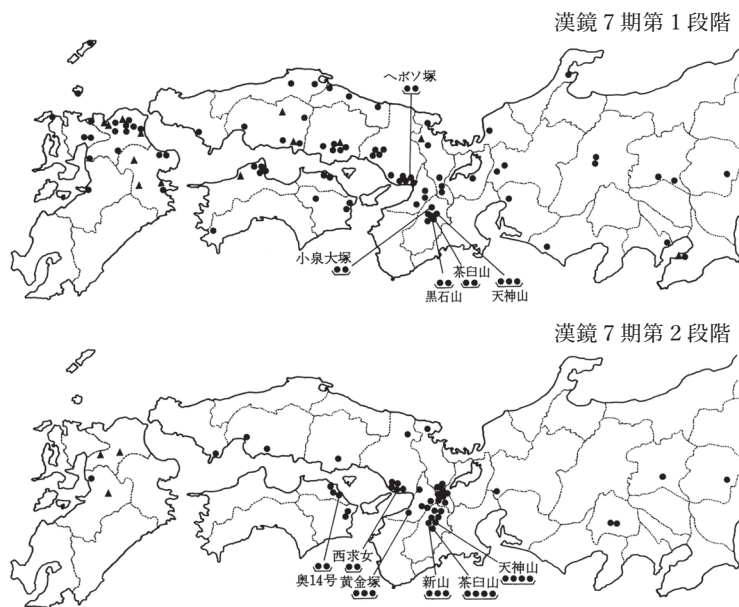


図1 上方作系獣帯鏡と画紋帯神獣鏡の分布 [岡村 1999]
 (上:上方作系獣帯鏡・飛禽鏡など 下:画紋帯神獣鏡)

とともに指摘され、分布の違いには年代差が反映されており、はじめ各地の首長が独自の経路によって入手したが、次第に畿内に存在していた有力者集団に掌握された結果と論じた [岡村 1999 ほか]。一方で、福永伸哉は岡村の見解に対し、面径の大きな鏡が畿内や西日本の有力古墳から多く出土することを主な理由として、既に畿内に成立していた政権によって面径の大きな画紋帯神獣鏡が畿内周辺に、面径の小さな上方作系獣帯鏡は遠方に配布されたと推定し、鏡のランクに基づく畿内政権の配布戦略の結果と論じた [福永 2001 ほか]。

両者の立場をめぐってほかの研究者も意見表明している [岸本 2011、実盛 2015、下垣 2011、辻田 2001、山田 2006 など]。近年は、両鏡式に年代差は存在しないとの考え方が優勢のように思われるが、意見は一致していない⁽²⁾。

徐州系鏡群と系統の整理 この分布の問題に対して、年代差や鏡の格の差ではなく系統差に注目した見解がある。森下章司は華北東部で作られたと考えられる徐州系鏡群の鏡式を銘文・紋様・形態的特徴をもとに系統的に細分し、上方作系獣帯鏡とかかわりが深い鏡に、飛禽鏡と袁氏作系画像鏡を挙げる [森下 2007・2011]。上方作系獣帯鏡と飛禽鏡は同時期の鏡でも稀な素紋平縁をもつ例が存在し、その親縁性は高いといえよう。また、袁氏作系画像鏡は仙人や天鹿を主題とするものが多いという点で共通する。さらに、森下は同じ徐州系鏡群のなかに、ほかに画紋帯神獣鏡や斜縁神獣鏡などを製作した系統が存在することも想定しており、上方作系獣帯鏡とは異なる生産系統であったと指摘する。そして、上方作系獣帯鏡と画紋帯神獣鏡の出土遺跡に「それほど大きな時期差は想定できない」と断ったうえで [森下 2007 p.45]、両系統に関連は少なく、鏡の系統差によって分布にも差があらわれたと論じたのである。上方作系獣帯鏡と画紋帯神獣鏡の関係性を考えるうえで重要な指摘と考える。

問題と本稿の指針 分布をめぐる論争には上方作系獣帯鏡と画紋帯神獣鏡の間に、年代差を認めるか否か意見の対立が存在している。これを解決するために、上方作系獣帯鏡そのものを細分し編年をおこなった研究も存在するが、型式学的研究によって導かれた組列を確かめる方法を欠いている。中国で科学的な発掘による出土例が少なく、出土しても副葬品は貧弱で簡素な後漢墓であることが大きな要因だろう。日本における出土古墳の年代に頼るという解決策も考えられるが、先に述べたような研究状況ではあまり有効とはみなせず、年代的な位置づけは難しいといわ

ざるを得ない。

こうした問題は上方銘をもつ鏡の変遷を追うことで自ずと解決できると考える。そこで、以下では「上方」を掲げた製作者がいつ、どこで、どのような鏡を製作していたか検討する。また、近年では、工人名に着目した研究をおこない製作者の活動を詳細に復元している研究もある。例えば、岡村は「杜氏」「張氏元公」など特定の製作者に着目し、銘文の特徴句や図像表現をもとに、製作者のどの時期の作品か考察している [岡村 2013ab・2017 ほか]。森下は「九子」「袁氏」など工房や雅号などの名称をとりあげ、銘文や図像表現にまとまりを見出す [森下 2011・2014 ほか]。「上方」は工房名と考えられているので、活動状況は後者に類似するだろう。本稿ではこれらの視点にならない、上方銘をもつ鏡を対象とする。分析手法は銘文ごとに他鏡式の影響や製作年代・地域を想定したうえで、図像表現やほかの属性もふまえて補強する。

対象とする資料 対象とする資料は大まかに二つのグループに分けられる。

まず、数量も多く生産活動の基軸となったであろう上方作系獸帯鏡を検討する。鏡式としてまとめられたようにいずれも似通った内区・外区紋様をもつが、他鏡式の特徴をもったものも存在しており異なる系統からの影響が想定される。従来の研究では、上方作系獸帯鏡には上方銘以外のもの（輪郭線をもたない浮彫式獸帯鏡）も含めて検討されてきたが、本稿では上方銘をもつことを重視し、ほかの論者が想定している上方作系獸帯鏡よりも範囲を絞って検討する⁽³⁾。ただし、個人・集団名が特定できず、本稿で対象とした上方作系獸帯鏡と図像・外区紋様がよく似るものは、同じ上方工房に所属した可能性が高いと判断し対象に含める。

次に、上方作系獸帯鏡ほど数量は多くないが、獸帯鏡以外の上方銘をもつ鏡を検討する。単純に理解するならば、上方作系獸帯鏡とそのほかの鏡式で上方銘をもつ鏡は同じ上方工房によって製作されたと考えられる。しかし、同銘であっても異なる製作者であった可能性も存在するため、同じ上方工房による製作か否かを検討する。上方銘をもつ鏡は「杜氏」「九子」などと比較すると数量が多く、製作期間も長期にわたると考えられるため、同じ工房かどうか問題となる。この判断基準は銘文の特徴句、図像表現の描法といった製作者の癖が一致することを重視し、ほかにも鈕孔形態や鏡の断面形状などの情報がわかる場合は適宜参照している。

二 上方作系獸帯鏡にみえる他鏡式の影響

まず、最も現存数が多く上方工房の主力製品とも評価できる上方作系獸帯鏡を検討したい。上方作系獸帯鏡には獸帯鏡以外に画像鏡や神獸鏡からの影響が指摘されているが [山田 2006、実盛 2015]、近年は銘文の検討や製作系統の評価などが深化しており、それらを反映しつつ本節で改めて検討してみたい。

銘文の分類 上方作系獸帯鏡の銘文は林裕己が設定した銘文 X と呼ばれる比較的短い銘文をもつものがほとんどである [林 2006]。しかしながら、上方作系獸帯鏡の中には異系統に由来する銘文をもつ例も存在する。銘文の型式は林の分類にしたがうが、上方作系獸帯鏡の検討に合わせるために若干の変更をおこなった⁽⁴⁾。上方作系獸帯鏡の銘文一覧は表 1～3 に示した。銘文型式がわ

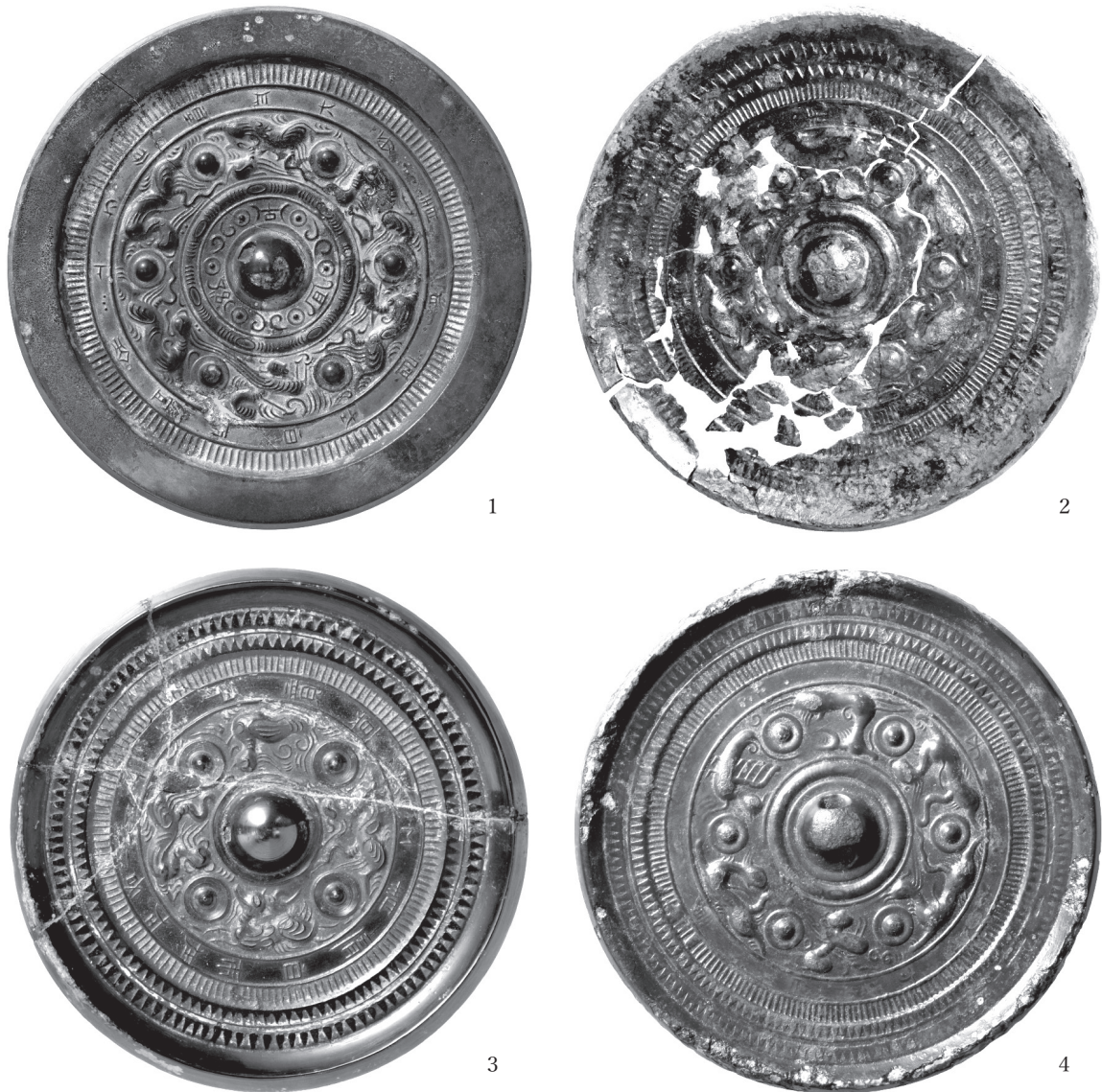


図2 上方作系獸帯鏡の諸例 獸帯鏡系列

(1:伝楽浪・寺師見國旧蔵 2:徳島県西山谷2号墳 3:大同江面石巖里・京都大学総合博物館蔵 4:愛知県笹ヶ根1号墳)

かるものを対象として、欠損や写真・拓本が鮮明でなく判読できないものや倣製品は含めていない。

X : 上方乍竟真大工 青龍白虎在左右 宜子孫

Pd : 上方乍竟自有道 青龍白虎居左右 宜子孫

Pb : 吾作明竟自有紀 令人長命宜子

S短 : 吾作明竟 幽涑三商 大吉 長宜子孫

以上の4型式とその省略型が基本となるが、朝鮮南井里116号墳(彩篋塚)出土鏡のように第一句末を「世少有」として第二句に「山人(仙人)」を入れた異なる位置づけのものや、第一句末を「好」とするものも存在する。銘文Pb・S短にみえる一人称の「吾作」は製品の紋様・形態をみると、本稿で対象とした上方作系獸帯鏡と酷似するものが存在したため検討に含めた。

次に、銘文と図像表現を中心にそのほかの要素も考慮して、それぞれの銘文をもつ一群の特徴と他鏡式からの影響をみていきたい。

表1 上方作系獸帯鏡の銘文一覧 獸帯鏡系列

地域	出土 / 所蔵 / 図録	銘型	銘文			
朝鮮	南井里 116 号墳 (彩篋塚)	—	上方乍竟世少有	上山人 長亘子孫		
山東	臨淄永流墓地金鼎綠城三期工地 M763	—	上方乍竟世少有	上□山□不□吉兮		
	中国古鏡図説 C27	X	□□乍竟真大好	青龍在左白盾居右	長亘□□兮	(亘子孫)
朝鮮	大同江面 (関口半田蔵・楽浪郡 1330)	X	上方乍竟真大好	青龍白盾在左右	曾年益壽	亘子
(朝鮮)	伝楽浪 (寺師見國旧蔵・黎明館蔵)	X	上方乍竟真大好	青龍居左白盾	亘子	(亘子孫)
	東京大学蔵 関野雄 Y19-22	X	上方乍竟真大好	青龍在左白虎居右	長亘孫子	
	五島美術館蔵 M300	X	□方乍竟□大好	青龍白 亘		
	中国古鏡図説 C28	X	□□乍□□□好	□龍 子		
朝鮮	大同江面石巖里 (多田春臣旧蔵・楽浪郡 1322)	X	上方乍竟真大工	青龍白□・・・・	(亘子孫)	
朝鮮	大同江面石巖里 (京都大学総合博物館蔵)	X	上方乍竟真大工	青龍白盾在左右		
香川	今岡古墳	X	上方乍竟真大工	青龍白盾	亘子	
徳島	西山谷 2 号墳	X	上方乍竟真□工	青龍□盾 子		
	西川 2000 図 24	X	上方乍竟真大工	□□右□	亘子	(・・・)
群馬	新田町赤堀 (宮田稲荷古墳)	X	上方乍竟真大工	在左	亘□孫	
広島	蔵王原古墳	X	上方□竟□大工	青白	亘子	
広島	中小田 1 号墳	X	上方乍竟真大工	青龍白 子		
	陳介祺旧蔵 簠齋十左	X	上□□竟真大工	青龍白 子		
	大阪歴史博物館蔵 考 589	X	上方乍竟真大工	青□ 子		
大阪	安威 0 号墳	X	上方乍竟真大工	青・・・		
広島	馬場谷 2 号墳	X	上方乍竟□大工	白 子		
	陳介祺旧蔵 113	X	上方乍竟真大工	白 子		
	学習院大学蔵 林裕己 75	X	上方乍竟真大□	白 子		
	磐田市埋蔵文化財センター蔵 渡邊晁啓仿 4	X	上方乍竟真大工	白 □		
愛媛	妙見山 1 号墳	X	上方乍竟真大工	青龍		
兵庫	塚ノ元古墳	X	上方乍竟真大□		・・・亘孫子	
	陳介祺旧蔵 118	X	上方□竟真大□		長亘子孫	
	東北歴史博物館蔵 杉山寿栄男 38	X	□□乍竟真□工		亘子・・・	
山東	臨淄車站墓地淄博七中工地 M3	X	上方乍竟真大工		長亘子	
鳥取	石州府 29 号墳	X	□□□竟真大工		亘子	
岡山	吉原 6 号墳	X	上方乍竟真大工		亘子	
	陳介祺旧蔵 112 (小校 15・36 裏上)	X	上方乍竟真大工		亘子	
	徐乃昌旧蔵 79	X	□□乍竟真大工		亘子	
遼寧	大連市甘井子区前牧城驛漢墓 (旅順 45)	X	上方乍竟真大工		長子	
(天津)	天津市博物館蔵 (小校 15・36 裏下、陳介祺 111)	X	上方乍竟真大工		子兮	
愛知	笹ヶ根 1 号墳	X	上方乍竟真大工		子	
(山東)	東平県博物館蔵	X	上方乍竟真大工		子	
広島	池の坊古墳	X	上方乍竟真大		亘孫子	
佐賀	中原遺跡 SP13231 木棺墓	—	□方□竟		長亘・・・	

・出土等の □ は踏み返しの可能性が高い
 ・銘文の () は鈕座銘

・・・・は複数文字判読不能
 ・□は単数文字判読不能

以下の表も全て同じ



図3 上方作系獣帯鏡の諸例 画像鏡系列
 (1:長野県弘法山古墳 2:伝奈良県・和泉市久保惣記念美術館蔵 53)

表2 上方作系獣帯鏡の銘文一覧 画像鏡系列

地域	出土/所蔵/図録	銘型	銘文		
京都	百々池古墳	Pd	□□□竟自有道	青龍在左白虎居右	長宜子□
(遼寧)	旅順博物館蔵 77	Pd	□□乍竟自有道	青□□□居左□	宜子
長野	弘法山古墳	Pd	上方作竟自有道	青龍左白虎居右	
	會津八一記念博物館蔵(服部 321)	Pd	上方乍竟自有道	青龍左・・・	
(奈良)	伝奈良(和泉市久保惣記念美術館 53)	Pd	上方乍竟自有道	青龍白虎左右	
	陳介祺旧蔵 120	Pd	□□乍□□□道	青龍白虎 子	
	西川 2000 図 3C	Pd	上□乍□□□道	青龍白□ 子	
群馬	矢場薬師塚古墳	(Pd)	上方作竟自有□		□宜子孫
(朝鮮)	伝楽浪(柴田鈴三旧蔵)	Pd	上方乍竟自有道		長宜子

上方作系獣帯鏡の定型 典型的な上方作系獣帯鏡は銘文 X「上方乍竟真大工 青龍白虎在左右 宜子孫」もしくはその省略形を基本とする。最も面数が多く、上方作系獣帯鏡の定型といえよう(以下、獣帯鏡系列と呼ぶ)。内区は6像で鈕座に銘をもつものともたないもの(図2-1・2)、4像のものがあるが(図2-3)、基本的には仙人・青龍・白虎・瑞鳥・辟邪・天鹿⁽⁶⁾を配置し、4像の場合はこの中から取捨選択される。選択される図像は他の銘文型式でも同様である。鈕孔方向に銘文に登場する青龍と白虎を対置させるものが多く、銘文の内容と図像配置の対応を図ったと考えられる。仙人と天鹿を積極的にもちいる点は同時期の別系統の鏡と比べても特徴的であり、研究史でふれたように「袁氏」と「上方」に限られる。表現は先端の尖った工具をもちい身体の細部まで丁寧に彫り込むものが多いが、明らかに省略・形骸・硬直化したものも存在し、製作時期は新しい可能性がある(図2-4)[山田 2005]。

画像鏡の影響 上方作系獣帯鏡のなかには、図像の線を太く表現した画像鏡に近いものが存在

(6)
149

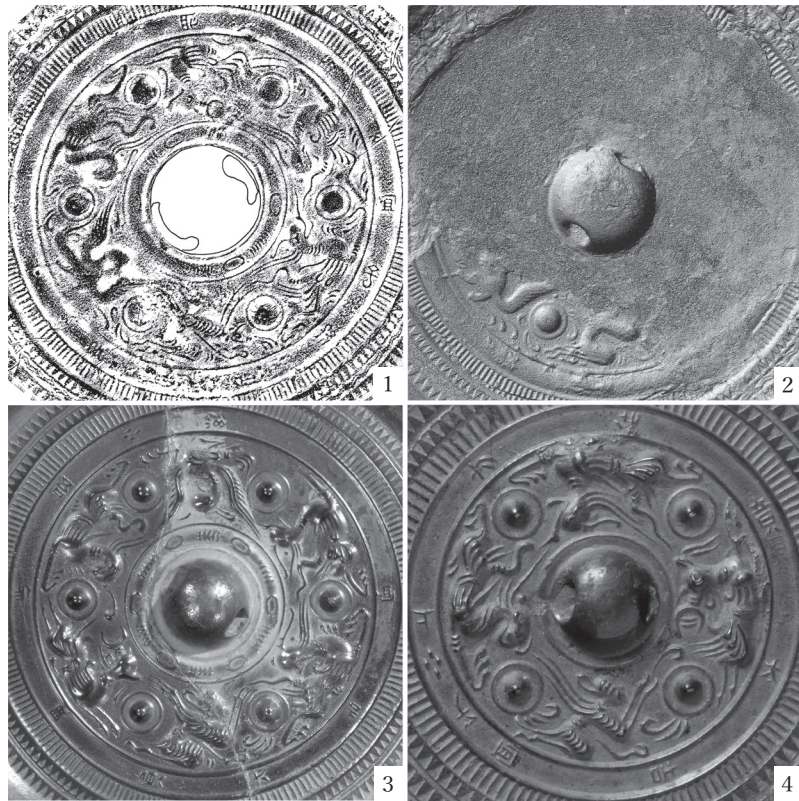


図4 上方作系獣帯鏡 神獣鏡系列

(1:大分県古稲荷所在石棺 2:兵庫県へボソ塚古墳 3:香川県石清尾山猫塚古墳
4:早稲田大学會津八一記念博物館蔵・服部コレクション 223)

表3 上方作系獣帯鏡の銘文一覧 神獣鏡系列

地域	出土/所蔵/図録	銘型	銘文			
大分	古稲荷所在石棺(宇佐宝鏡寺)	S短	吾作明竟	幽凍三商	大吉	長宜子孫□□
香川	石清尾山猫塚古墳	S短	吾作明竟	大吉	宜子孫	
	會津八一記念博物館蔵(服部 223)	S短	上方作竟	大吉	宜子	
鳥取	桂見2号墳	Pb	吾作明竟自有紀	令人長命	宜子	(天王日□)
長野	中山36号墳	Pb	上方作竟自有紀	□□□□宜□□		

する(図3-1)。細部の表現が明確ではなく、一見すると簡略化しているようにもみえる。こうした表現をもつものは銘文Pd「上方乍竟自有道 青龍白虎居左右 宜子孫」に限定される(以下、画像鏡系列と呼ぶ)。ただし、銘文Pdであっても獣帯鏡系列と同様の表現をもつ製品も存在しており(図3-2)、二つの系列は近しい関係で鏡を製作していたと考えられる。銘文PdとXは第1句末の「自有道」と「真大工」が異なるのみで、そのほかは同じ銘文をもち大きな差はない。したがって、上方作系獣帯鏡は銘文Xをもつ獣帯鏡系列が生産の核であり、銘文Pdを使用して画像鏡に由来をもつ製作者が副次的にかかわっていたと推測する。

なお、銘文Pdのように第一句末を「道」とするものは、他鏡式の例が少なく上方作系獣帯鏡と近しい関係にあると考えられている斜縁神獣鏡に存在する点で注目できる。また、画像鏡の銘文には第一句末を「自有意」とするものがあるが、「意」と「道」は字形がよく似た例もあり、「道」

とするものは「意」とした銘文から派生した可能性があるため、銘文の由来からみても画像鏡の影響を想定できる。

神獸鏡の影響 上方銘をもつものに対象を絞ったが、一人称の「吾作」銘をもつもので本稿で対象とした上方作系獸帯鏡と図像表現が酷似する製品がわずかに存在しており検討対象に含める。「吾作」や大分県古稻荷所在石棺出土鏡の「幽涑三商」、四言句の銘文は神獸鏡に由来し、上方作系獸帯鏡に神獸鏡の影響があったと考える（以下、神獸鏡系列と呼ぶ）。これらは銘文に「大吉」を挿入する特徴がある。大分県古稻荷所在石棺出土鏡は兵庫県へボソ塚古墳出土鏡と同型であり計4面存在する（図4）。図像表現は獸帯鏡系列に似ているが、総じて精緻な印象を受ける。この4面は全て表現が酷似しており、瑞鳥の表現、天鹿の後脚付け根の形状、図像と乳の間を埋める紋様などの描法が一致する。銘文S短「吾作明竟 幽涑三商 大吉 長亘子孫」とその省略形で共通するだけでなく銘文の字形も酷似しているため、これまで検討した系列と比較すると強固なまとまりを示す。

上方作系獸帯鏡と神獸鏡はこれまで接点あまり考えられてこなかったが、銘文をふまえると影響があったことは疑いない。上方作系獸帯鏡を製作していた集団の一人がこういった要素をもつ上方作系獸帯鏡をいきなり創作したとは考え難く、これらを同工鏡とみなすならば神獸鏡の製作者が移入してきた、もしくは模作した可能性が高く製作者の移動や神獸鏡の影響を示す直接的な資料として重要と考える。

銘文Pb「吾作明竟自有紀 令人長命亘子」をもつ上方作系獸帯鏡と斜縁神獸鏡の関係は既に指摘しており、本稿では省略したい [馬淵 2022]。同じ神獸鏡系列にまとめたが、銘文S短とPbの製品には表現が精緻であること以外、共通点は少ない。

天鹿の表現 銘文と他鏡式の影響をもとに三つの系列を設定した。ほかにも鏡式に由来する特徴として天鹿に注目したい。天鹿は上方作系獸帯鏡と袁氏作系画像鏡を特徴づける図像とふれた

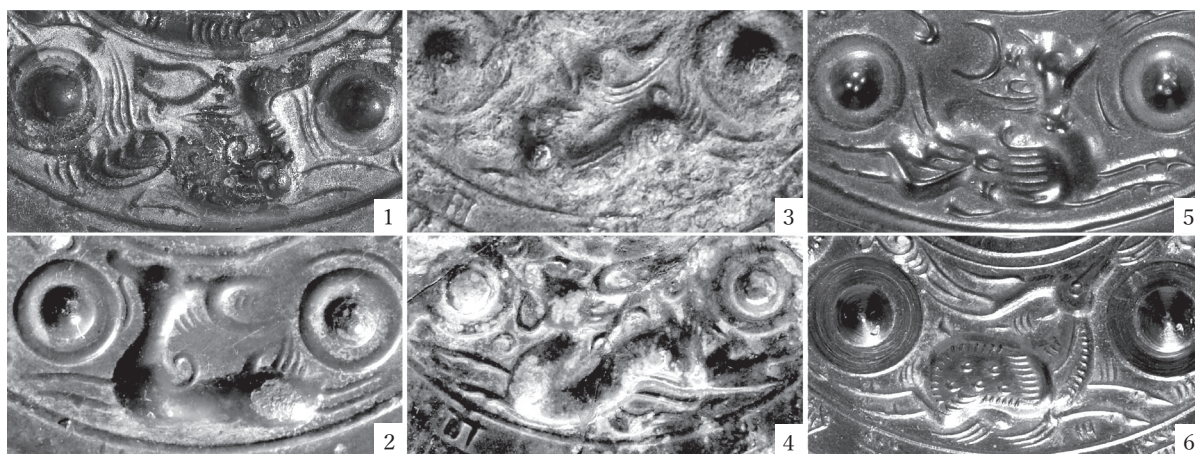


図5 天鹿の表現

(1: 伝楽浪・寺師見國旧蔵 2: 愛知県笹ヶ根1号墳 3: 早稲田大学會津八一記念博物館蔵・服部コレクション 321
4: 長野県弘法山古墳 5: 香川県石清尾山猫塚古墳 6: 泉屋博古館蔵 M189)

が、漢鏡5期にはじまる江南の浮彫式獣帯鏡にも散見する。上方作系獣帯鏡を含む獣帯鏡では前脚の片方を折り曲げたり、後脚の片方を身体の下に描いたり、駆けているように表現するものが多い(図5-1)。一方で、袁氏作系画像鏡をみると、前後脚ともにぴんと張り、身体の下には陰部の表現がある(図5-6)。画像鏡系列の天鹿はそれを細線だけであらわす省略した表現となっており、画像鏡からの影響がうかがえる。陰部を描くスペースを確保するために身体を横倒しのS字形にくねらせる特徴も備える(図5-3・4)。こうした表現は獣帯鏡系列でもわずかに存在し(図4-3)、両系列の近い関係を補強する。面数が少ないため確定できないが、銘文S短は脚が5本に見えるような事例が存在し、普段、天鹿を図像にもちいない神獣鏡の製作者が天鹿を描く際のルールのようなものを理解できていなかった可能性がある(図5-5)。銘文Pbはさらに面数が少ないため評価し難い。獣帯鏡系列をみると、スペースの関係からか天鹿の下に何も紋様をもたないものは古相のものから存在するが(とくに4像)、製作時期が下がる製品はこの表現が省略される傾向もみうけられる(図5-2)。

以上の様に、天鹿の表現からも銘文で予想された系列と影響関係にあった鏡式が補強できる。

小結 銘文を中心に検討することで、上方作系獣帯鏡には画像鏡と神獣鏡からの影響があったことを指摘した。主系列となる上方作系獣帯鏡の製作者と画像鏡に近い製作者が参与して生産活動にあたっていたと推測できる。また、これまで上方作系獣帯鏡と神獣鏡は切り離されて考えられることが多かったが、上方作系獣帯鏡のうち神獣鏡の銘文S短をもつものが存在することは、出自の異なる生産系統である神獣鏡の製作者との接点があったことを示すだろう。

以上の様に、上方作系獣帯鏡といえども一系列的な生産活動ではなく、内包する影響関係と系列は実に多様である。全体としてはまとまりを示すが、袁氏作系画像鏡や神獣鏡の影響を反映して、生産される製品には大小の差異がみえる。

三 上方銘をもつその他鏡式の評価

前節で上方作系獣帯鏡について検討したが、上方銘をもつ鏡は獣帯鏡以外にも存在している。盤龍鏡・画像鏡・神獣鏡など多岐にわたるが、本稿でそれぞれの鏡式を一から検討することは難しいため、ほかの研究者の位置づけを援用しつつ、出現が古いと考えられている鏡式から順にみていく。

銘文の分類 まず、前節と同様に銘文の分類からはじめたい。銘文と鏡式にある程度の対応がみられ、画像鏡・盤龍鏡と神獣鏡・その関連鏡の大きく二つに分けられる。上方銘をもつその他鏡式の銘文は表4・5に示した。

Qa : 上方作竟佳且好 明而日月世少有 刻治今守悉皆在

Pb : 上方作竟自有紀 除去不羊宜古市 上有東王父西王母

P短 : 上方作竟自有紀 除去不羊宜古市 (大吉)

以上の3型式が主となる。それぞれの鏡式で、QもしくはPのどちらの型式が多いか明確に分かれており、選択する銘文型式と鏡式にある程度の対応関係がある。なお、銘文Pの「除去不羊」は、

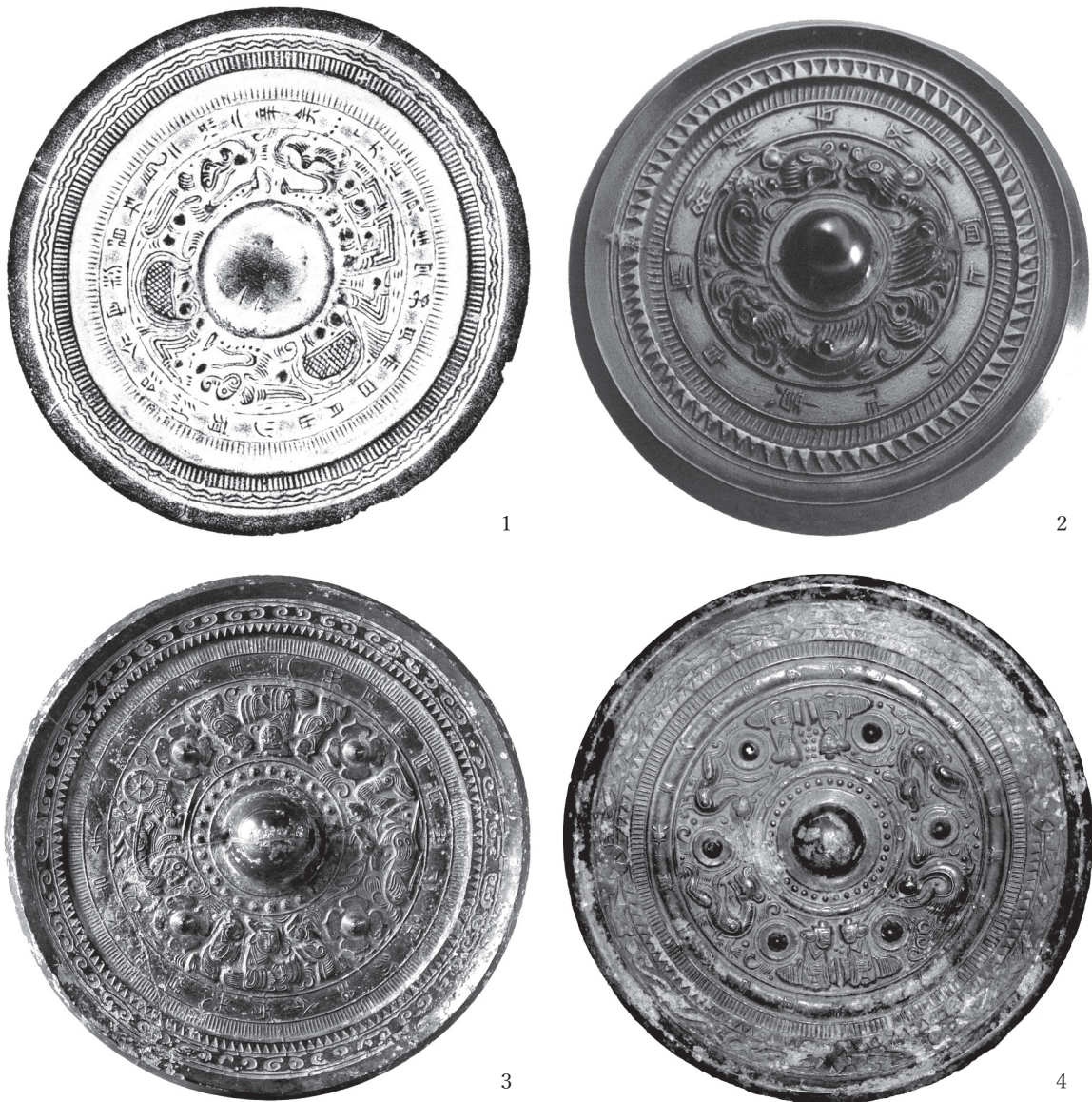


図6 上方作盤龍鏡・画像鏡の諸例

(1: 陳介祺旧蔵 141 2: 古鏡の美 53 3: 寿県博物館蔵・六安 121 4: 鄂州市鄂鋼防空洞古墓・鄂州 88)

本来は「辟去不羊」が普通であり珍しい例とされているが、「中国古鏡の研究」班 2011・724)、上方銘をもつ鏡では「除去」とすることが特徴といえる。

(1) 上方銘をもつ盤龍鏡と画像鏡

上方銘をもつ盤龍鏡 盤龍鏡は龍虎を主題とする鏡で、漢鏡5期に淮河流域の淮派の工人によって創作されたと考えられている [岡村 1993・2012 ほか]。上野祥史のいう三羊系や三輔系など小型の盤龍鏡は後出する可能性が高い [上野 2003・2005]。上方作盤龍鏡の銘文は銘文 Qa「上方作竟佳且好 明而日月世少有 刻治今守悉皆在」の語句を共通することが多く、「明如日月」(「如」は「而」の仮借)は徐州系に散見する銘文と評価されている [「中国古鏡の研究」班 2011・729]。わずかに P 短「上方作竟自有紀 …」とするものも存在する (図 6・1・2)。上方作盤龍鏡には

表4 上方作盤龍鏡・画像鏡の銘文一覧

盤龍鏡

地域	出土/所蔵/図録	銘型	銘文			
	小校経閣金文 15-35 表上	Qa	上方作竟佳且好	明而日月世少有	刻治今守悉皆在	長保二親亘孫子
	[五島美術館 M150]	Qa	上方作竟佳且好	明而日月世少有	□治今守悉皆在	長二親□□□
	陳介祺 141 [142]	Qa	上方作竟佳且好	明而日月世少有	刻治今守悉皆在	長保二親矣
湖北	仙桃市沔陽県	Qa	上方作竟佳且好	明而日月世少有	□治□守悉皆在	大吉羊矣
	古鏡の美 53	P 短	上方作竟自有紀	除去不羊亘		

画像鏡

地域	出土/所蔵/図録	銘型	銘文			
(安徽)	寿県博物館蔵 (六安 121)	Qa	上方作竟佳且好	明而日月世少有	刻治今守悉皆在	大吉矣
	金石索・上方吉陽鏡	Qa	上方作竟佳且好	明而日月世少有	大富貴亘孫子	大吉陽兮
	金石索・漢上方赤松子鏡	Qa	上方作竟佳且好	明而日月世少有	紀上有仙人赤松子	
	小校経閣金文 15-35 表下	(P)	上方作竟自有紀	長亘子孫世少有		
	陝西省博物館蔵 (中原附 7)	Pb	上方作竟自有紀	除去不羊亘古市	上有東王父西王母	長亘子 大吉
湖北	鄂州市鄂鋼防空洞古墓 (鄂州 88)	Pb	上方作竟自有紀	除去不羊亘古市	上有東王父西王母兮	
	銅華清明 118	P 短	上方作竟自有己	余去不羊亘古市兮		

上野分類の龍氏系・三羊系が含まれ、紋様の崩れた猫顔のものや三羊系のもが含まれる点は特徴といえる。漢鏡 5・6 期に相当し、龍氏系は徐州や楽浪郡、三羊系は徐州・洛陽周辺と長江流域以南から広範に出土している [上野 2003]。

上方銘をもつ画像鏡 画像鏡の定義は曖昧だが、鏡背の内区に広くスペースをとり西王母・東王公や瑞獣を主題にした製品が多い。漢鏡 5 期末に会稽郡呉県に由来する呉派によって創作されたと考えられており [岡村 2010]、研究史で触れた袁氏作系画像鏡などは漢鏡 7 期に製作される。上方作画像鏡の銘文は盤龍鏡と同様の銘文 Qa「上方作竟佳且好 明而日月世少有 …」をもつものが多く徐州系の銘文と評価できる。一方で銘文 Pb「上方作竟自有紀 除去不羊亘古市」の割合は盤龍鏡よりも多い (図 6-3・4)。上方作画像鏡は上野分類のデフォルメ神獣式に含まれ、龍氏系・三羊系が主体をなし、漢鏡 6・7 期⁽⁹⁾に製作されたと考えられており、両系統とも長江流域や淮河以南から出土することが多い [上野 2001]。

上方作画像鏡には上方作系獸帯鏡と同系統である袁氏作系画像鏡や上方作系獸帯鏡の画像鏡系列と似たような例が存在しない。また、龍氏系・三羊系画像鏡の出土地をふまえると、上方作画像鏡は徐州系の銘文をもつが徐州地域内でも南方に偏り、江南地域の影響を受けた可能性がある。これら二つの事実をふまえると、同じ徐州系鏡群に含まれていても、袁氏作系画像鏡や上方作系獸帯鏡とは系統が異なると考えられる。

上方銘をもつ盤龍鏡と画像鏡は徐州系の銘文をもち、同じ上方銘で徐州系の上方作系獸帯鏡と無関係ではないと考えられるが、そのほかの属性は類似点が少ない。また、西方に由来する三羊系や、南方に由来する龍氏系の影響がみえた点は上方作系獸帯鏡とは大きく異なる。

(2) 上方銘をもつ神獸鏡など

上方銘をもつ神獸鏡と分類 一般に画紋帯神獸鏡と呼ばれる鏡は、内区に西王母などの神仙を配置し、外区に飛禽走獸紋（画紋帯）をめぐらせる。内区外周に半円方形帯をもち、方形には「吾作明鏡 幽凍三商」に始まる四言句をもつ製品が多い。紀年鏡の存在から2世紀初めに廣漢郡で創作され、次第に東伝していったと考えられている。

上方作神獸鏡は拙劣な鏡が多く、優品であってもほかの画紋帯神獸鏡と比較するとイレギュラーであったり、浅い浮彫であったりすることが注目できる。銘文P「上方作鏡自有紀 除去不羊宜古市」に統一され、盤龍鏡・画像鏡にみた「明而日月」や、由来不明の「位至三公」がわずかに混ざる。また、上方作神獸鏡とまとめたが、その中でも特徴をもとに複数のグループに分けられ次に示す。説明の便宜を図るために代表的な例を名称に掲げた。なお、画紋帯神獸鏡は図像配置によって細分されており、和泉黄金塚古墳類・泉屋博古館 M20・M106 類は環状乳神獸鏡、山東民間蔵鏡 163 類は求心式神獸鏡、皖江博物館類は分類不能の神獸鏡に相当する。

和泉黄金塚古墳類：大阪府和泉黄金塚古墳出土鏡、伝京都府石不動古墳出土鏡（図7-1）の2例。精緻な紋様をもち、銘文も長銘である。ただし、神獸鏡にしては浅い浮彫である。伝京都府石不動古墳出土鏡は岩本崇によって上野分類の華北東部系に位置づけられているが、内区の天蓋や外区の三角紋などを挙げ「やや異例の存在といえる画文帯神獸鏡」と評価されている〔岩本 2017 p.20〕。神獸鏡にしては立体感に乏しい点や、下辺が直線的で長楕円を呈する鈕孔形態などを上方作系獸帯鏡と結びつけており、示唆に富む〔岩本 2017〕。また、村瀬陸によって内区の天蓋や外区の三角紋の共通性から華西系の九子作神獸鏡の影響が指摘されている〔村瀬 2019〕。大阪府和泉黄金塚古墳出土鏡の外区紋様も華西系鏡群にみられる変形雲龍紋であり、同系統から影響があったことを補強する。華西系の三段式神仙鏡において、「九子作」の語句が成立するのは三段式神仙鏡 b 類段階とされている〔森下 2012〕。

泉屋博古館 M20 類：泉屋博古館 M20（図7-2）、浙江省博物館蔵鏡（浙江 47）などが挙げられる。先のグループに近い神像表現にみえるが、そのほかの図像表現や製作技術はかなり拙劣になっている。浅い浮彫で外区の三角紋も共通しており、同様に華西系⁽⁹⁾の影響を示すことから、和泉黄金塚古墳類に近しい製作者⁽⁹⁾で時期差を示す可能性がある。

山東民間蔵鏡 163 類：山東民間蔵鏡 163（図7-3）、常任侠氏蔵鏡の2例。多くの求心式神獸鏡は崩れた紋様・図像配置をもつため、後漢末～三国時代など新しく位置づけられる傾向がある。上方作求心式神獸鏡も例にもれず、神獸像の頭部が肥大化しややデフォルメがかかった表現になっている。神像の髪を3つのコブで表現し、髪の生え際をはっきり描き、脇侍の足元裾を長めにとるなどの特徴や、銘文に「位至三公」を挿入することは、森下のいう三段式神仙鏡 c 類に通じる〔森下 2012〕。

泉屋博古館 M106 類：泉屋博古館 M106（図7-4）などが挙げられる。かなり深い浮彫になっており、上の3類と表現も異なる。図像表現は拙劣である。上方作神

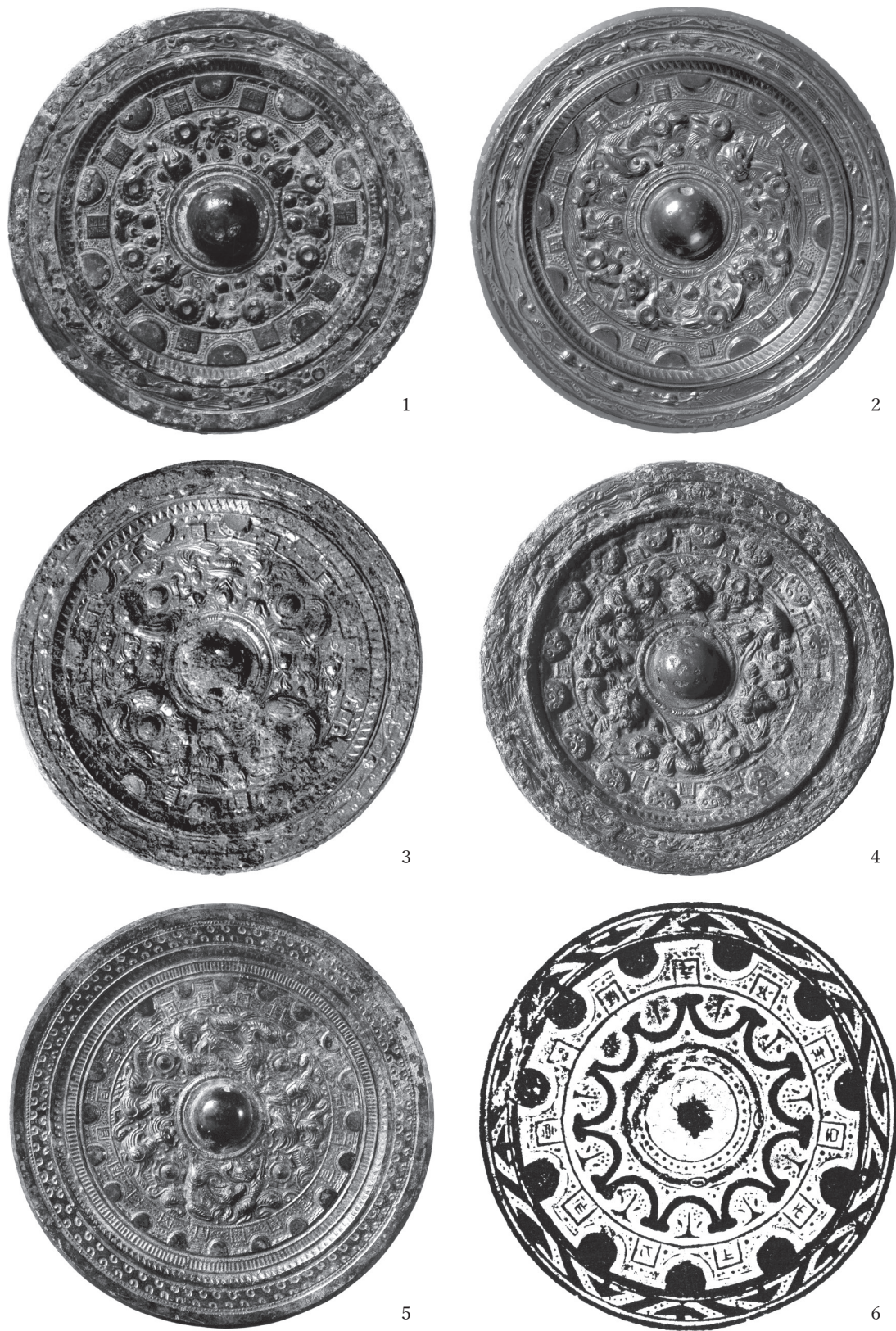


図7 上方作神獸鏡・葉紋鏡

(1: 伝京都府石不動古墳 2: 泉屋博古館蔵 M20 3: 山東民間蔵鏡 163

4: 泉屋博古館蔵 M106 5: 皖江博物館蔵・六安 84 6: 小校經閣金文 15-36 表上・嵩雲居 75)

獣鏡は上方銘をもつほかの鏡と何らかの接点を見出せるが、このグループは評価し難い。

皖江博物館類 : 皖江博物館蔵鏡（六安 84）（図 7-5）、湖北雲夢県周田癩痢墩 1 号墓出土鏡などが挙げられる。画紋帯をもたず内区に獣や仙人のみを配置するため、厳密にいうと神獣鏡に含めるべきではないかもしれないが、半円方形帯や斜面内側に鋸歯紋を施す界圈などは、神獣鏡の影響を反映しているためここに含めた。ちょうど画像鏡と神獣鏡を足して 2 で割ったような特徴をもち、内区の獣紋は上野のいう三羊系画像鏡に似る〔上野 2001〕。

先にも述べたが、上方作神獣鏡をみると大多数の神獣鏡とは異なる特徴をもつものが多く、図像の拙劣さ、銘文型式が異なるなどの点が指摘できる。上野の神獣鏡分類に当てはまらないものが多いことも証左となろう〔上野 2000〕。こういった製品が作られた背景には、「上方」が廣漢系の製作者の創作した神獣鏡の内包する世界観を読みとれていなかった状況があると考えられる。図像にある西王母・東王父などは理解できていても、そのほかの神仙や銘文の内容までは理解できていなかったために異質な神獣鏡が製作されたのだろう。これは、もともと徐州地域では神獣鏡が知られていなかったためや、新しい時期の製品で紋様や銘文が崩れたなどの理由が考えられる。それぞれのグループの製作時期は、三羊系盤龍鏡・画像鏡との類似をふまえると皖江博物館類は漢鏡 7 期におさまる。九子作対置式神獣鏡の成立時期（2 世紀後半）をふまえると〔森下 2012〕、和泉黄金塚類が 2 世紀後葉以降に位置づけられ泉屋博古館 M20 類は後に続き、山東民間蔵鏡 163 類は 3 世紀前葉まで生産されたと考える。森下分類 b・c 類との共通性が認められたため、それぞれの段階で断続的に華西系の影響を受けた可能性もある。

和泉黄金塚・泉屋博古館 M20 類は薄い浮彫をもち上方作系獣帯鏡への共通性が認められるが、泉屋博古館 M106 類は上方作神獣鏡の中でもややイレギュラーな感が強い。山東民間蔵鏡 163 類は三段式神仙鏡との共通性を指摘できるものの、ほかの上方銘をもつ鏡とは接点を見出し難い。皖江博物館類は三羊系の上方作画像鏡との共通性が認められる。各グループ一貫して特殊な神獣鏡であるという特徴は共通しているが、分類して説明したように多様性を認められる点は、同じ上方作神獣鏡であっても製作者や製作時期の違いを反映している可能性が高い。

その他上方銘をもつ鏡式 神獣鏡と同様の半円方形帯をもつ葉紋鏡と呼ばれる特殊な鏡式がある。主紋は帯状の太線で内向きの連弧をつくり、弧の先端をクローバー形に肥大させる。弧の間には逆三角や「T」字形の紋様をおく。この鏡式は総数の少ない鏡だが、上方銘をもつ製品が散見することは注目でき、上方作神獣鏡の和泉黄金塚古墳・泉屋博古館 M20 類にみた三角形の外区紋様をもつことから、神獣鏡と同じく華西系の影響を推測できる（図 7-6）。和泉黄金塚類などの神獣鏡を製作していた工房が葉紋鏡の製作にもかかわっていたと考える。

また、これまでは画紋帯神獣鏡に由来する平縁の神獣鏡にかかわる諸例を説明してきたが、章丘市博物館蔵鏡、交野東車塚古墳出土鏡の 2 例は斜縁神獣鏡・四獣鏡に含まれる。

表5 上方作神獸鏡・その他の銘文一覧

画紋帯神獸鏡

地域	出土/所蔵/図録	銘型	銘文			
大阪	和泉黄金塚古墳	Pb	上方作竟自有紀	除去不羊宜□□	□□□西王母	□人□□不知□
			□□	上方作竟自有紀	除去不羊宜古市	上□□□□
(京都)	伝石不動古墳(北和城南古墳)	Pb	上方作竟自有紀	辟去不羊宜古市	上有□王父西王母	令人長命多□孫
			大吉兮	君宜子兮	長宜官王	
	浙江省博物館蔵(浙江47)	P短	上方作竟自有紀	除去不羊宜古市		
	泉屋博古館蔵 M20	P短	上方作竟自有紀	羊不羊□古		
	山東省博物館蔵 36	P短	上方作竟自有紀	除去不羊兮		
(河南)	伝河南省(巖窟349)	P短	上方作竟自有紀	除去宜古市		
湖北	鄂州市西山(鄂州98)	P短	上方作竟自有紀	大吉兮		
(安徽)	皖江140	P短	上方作竟自有紀	君宜□		
	常任俠蔵	—	上方作竟	君宜生子	位至三公	
	山東民間蔵鏡 163	—	上方作工	天王日月	位至三公	
	泉屋博古館蔵 M106	P短	上方作自有紀	□□羊宜古市	大吉□兮	
	古鏡の美 48	P短	上方作□有己	□□□□古市	大吉□	
(安徽)	皖江博物館蔵(六安84)	W	上方作竟自有己	明而日月世少	大吉	□□宜古市
安徽	舒城県棠樹郷寒塘村(六安95)	P短	上方□□□□□	□□□□□	□去不羊宜古□	大吉
湖北	雲夢県周田癩痢墩1号墓(孝感47)	P短	上方作竟自有紀	辟去不羊宜古市兮		
安徽	寿县茶庵馬家古堆東漢墓	P短	上方作竟自有紀	除去不羊宜古市		

葉紋鏡

地域	出土/所蔵/図録	銘型	銘文	
	ハルヴィル旧蔵(欧米104上)	P短	上方作□自有紀	除去不羊吉
(湖北)	雲夢県博物館蔵(孝感50)	P短	上方作竟自有紀	羊吉宜古市
	小校経閣金文15-36表上(嵩雲居75)	P短	上方作竟□□	除去不羊古市

斜縁神獸鏡・四獸鏡

地域	出土/所蔵/図録	銘型	銘文			
大阪	交野東車塚古墳	W	上方作□□□道	□而日月□少有	□□□□□皆在	長保二親吉
(山東)	章丘市博物館蔵	P短	上□□竟自有紀	□□□□宜子孫		

小結 現状では、上方作系獸帯鏡とその他鏡式の共通性は工房名の「上方」以外に見いだせない。同じ上方銘をもつことを積極的に評価するならば、徐州系の銘文が共通することや、上方作神獸鏡の和泉黄金塚古墳・泉屋博古館 M20 類は浅い浮彫と鈕孔形態をあげることができようか。

上方銘をもつその他鏡式の検討をまとめると①銘文をみると型式は異なるが上方作系獸帯鏡と同じ徐州系に位置づけられる。②上方作神獸鏡は紋様の崩れた製品が多数を占め、後出する可能性がある。しかし、この特徴でまとめられるにもかかわらず、上方作神獸鏡の類型は多様である。③徐州系以外の系統では、龍氏系・三羊系・華西系の影響がある。

四 上方工房の生産活動

第2節で上方作系獣帯鏡を、第3節で上方銘をもつその他鏡式を検討した。本節ではそれらを総合的に検討することで、とくに神獣鏡と徐州地域という観点から、上方銘をもつ鏡の変遷を追ってみたい。

上方銘をもつ鏡の分布・系統・流通 上方作系獣帯鏡とその他鏡式の「上方」が同じ上方工房なのか検討するため、出土地を地図に落とすと分布に顕著な差が認められた(図8)。

上方作系獣帯鏡は山東半島を中心に出土し、朝鮮半島北部や日本列島からも大量に出土している。しかし、上方作盤龍鏡・画像鏡・神獣鏡は現在の安徽省中部・湖北省東部周辺からの出土が目立ち、上方作系獣帯鏡の出土地とは大きく異なる。同じ徐州系の銘文をもつが、分布をみると南北に分かれる。これまでの検討では、上方作系獣帯鏡とその他鏡式では同じ「上方」とみなし難いと判断してきた。分布も異なるため工房や製作地も異なると考える。画像鏡にみえた南方の要素や、淮河流域にルーツをもつ盤龍鏡の存在もその証左となるだろう。

盤龍鏡と画像鏡の一部は上方作系獣帯鏡よりも年代の古い製品が含まれるため、分布にも年代差が反映された可能性が高い。ただし、上方作系獣帯鏡・上方銘の三羊系画像鏡・上方作神獣鏡は、いずれも漢鏡7期におさまるため、分布差が製作者集団の差につながる可能性は高い。もちろん、漢鏡7期の間に工房が転々とした可能性も排除しきれないが、上方作系獣帯鏡と大阪府和泉黄金塚古墳・泉屋博古館 M20 類以外には積極的に共通性を見出し難いため、いずれも異なる上方工房であったとみなしておきたい。同じ「上方」を号した理由はよくわからないが、漢鏡6～7期に上方銘を入れることが徐州地域内で流行したためであるのかもしれない。

生産地から消費地(出土地)について、武昌(現武漢市周辺)からの出土も目立つが、生産地

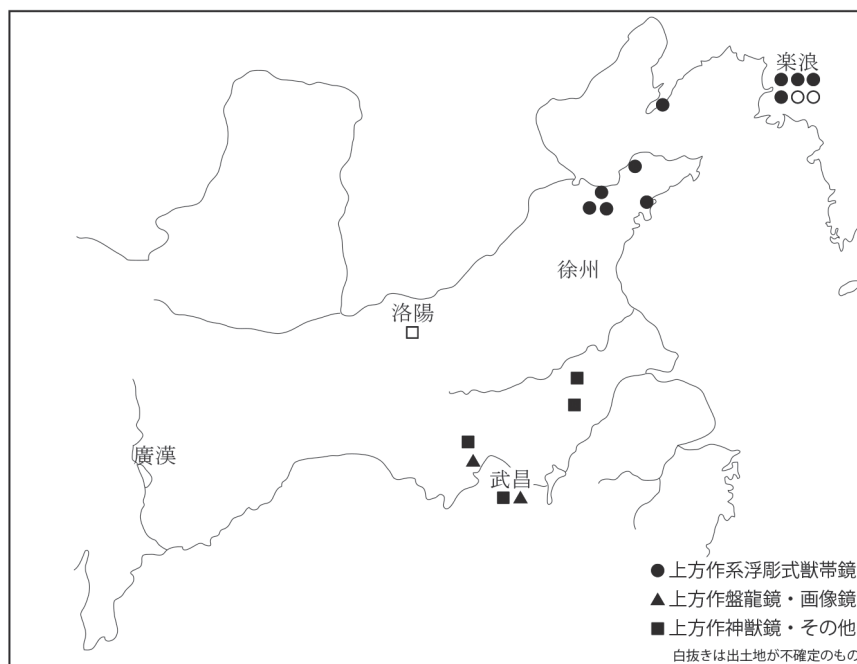


図8 上方銘をもつ鏡の分布

から消費地までの徐州－楽浪－日本列島ルートが整備されていたのと同様に、多数の銅鏡が出土する武昌も一大消費地であり、徐州領域南部産の製品がもたらされたと考えられる。なお、上方作神獸鏡が日本から出土することは徐州系画紋帯神獸鏡が日本列島から多数出土する現象と軌を一にするだろう [上野 2000]。盤龍鏡と画像鏡は日本列島から出土していないが、神獸鏡よりも古い製品で朝鮮半島や日本列島に銅鏡がもたらされることの少なかった漢鏡 6 期に流通していたためと考えておきたい。上方作系獸帯鏡でも長野県弘法山古墳や鳥取県桂見 2 号墳など、定型以外の系列の鏡が列島でも畿内以外から多数出土している点は興味深い。同じ上方作系獸帯鏡でも系列や製作年代によって流通経路に差があった可能性がある。

上方作系獸帯鏡と神獸鏡 上方作系獸帯鏡と上方作神獸鏡には同じ徐州地域に神獸鏡が広まった過程がみえる。廣漢や華西に由来する神獸鏡製作者の移入や、もともと徐州地域にいた鏡の製作者による模倣生産が想定され、徐州地域では神獸鏡の情報を知り得ない状況下において、鏡作りがおこなわれていた時期があることは確かである。上方作系獸帯鏡の製作においては何かしら神獸鏡の影響があったと考えられるが、どういった関係性だったのだろうか。

本稿では型式学的な検討をおこなっていないが上方作系獸帯鏡の獸帯鏡系列において、図像表現の省略化が進んだものは新相に位置づけられると判断した [山田 2006]。画像鏡系列と神獸鏡系列が獸帯鏡系列のどの段階に位置づけられるかは判断が難しい。系列を無視して図像表現の精粗を時期差とみなすならば両系統とも古相の製品を含む。しかし、神獸鏡系列は検討の余地がある。というのも、銘文 S 短群の製作者にみたように、上方作系獸帯鏡の天鹿の表現を理解できていない点は、部外者の関連が想定できる。とくに四川地域を出自とする神獸鏡製作者（廣漢系）が上方工房に流入する機会があったのだろう。神獸鏡の東伝時期は 2 世紀末と考えられ、上方作系獸帯鏡はそれ以前から存在していたと考えられる。ほかにも上方作系獸帯鏡と斜縁神獸鏡の前後関係によるところが大きい。斜縁神獸鏡 Pb 系統と強烈な結びつきをもつ桂見 2 号墳出土鏡を古く位置づけるならば [馬淵 2022]、上方作系獸帯鏡と斜縁神獸鏡の間に製作時期の差はほぼなくなるため、既存の研究に与える影響が大きい。ひとまず、時間差があったと認識しておくのが穏当だろう。実際に大分県古稻荷所在石棺出土鏡と鳥取県桂見 2 号墳出土鏡の鈕の断面形状は斜縁神獸鏡や求心式神獸鏡に類例がある。また、上方作神獸鏡は比較的新しい時期の製品で構成されることも参考となる。

ただし、古相の上方作系獸帯鏡との表現の共通性、大同江面出土鏡（楽浪郡 1330）に挿入された「曾年益壽」銘などから、本稿で対象とした上方作系獸帯鏡の製作当初から神獸鏡の影響がなかったとはいえない。仮に神獸鏡系列が上方作系獸帯鏡の創作当初から生産にかかわっていたとしても、省略化が進んだ製品に神獸鏡の影響はみられないので、非常に限定的だったと考える。

徐州地域に廣漢系と華西系の両系統の影響があったことは森下によって指摘されており [森下 2016]、近年では斜縁同向式神獸鏡と獸首鏡の共通要素からも廣漢系の影響が認められている [岩本 2019]。上方作系獸帯鏡もこうした徐州と四川・陝西などの西方にあった鏡の製作系統との交流を示す資料となるだろう。

「上方」の変遷 ここまで様々な鏡式に記された上方銘を集め、それぞれ年代・地域・鏡式・製作者の影響を列挙してきた。大枠では徐州地域にまとめられるものの、その実態は多様であり、

一人の工人・一つの工房とは考え難い。大きく分けて漢鏡5期末から三国時代初頭までにおさまる徐州南部系（盤龍鏡・画像鏡・神獸鏡など）と、漢鏡7期の徐州北部系（上方作系獸帶鏡）の二つの「上方」に分けられる。徐州南部系は漢鏡6～7期の盤龍鏡・画像鏡・一部の神獸鏡、漢鏡7期の神獸鏡の二つに細分できる。

徐州南部系は漢鏡5・6期に龍氏系盤龍鏡・画像鏡を製作していた。漢鏡6期末や漢鏡7期になると三羊系盤龍鏡・画像鏡に変わり、上方作神獸鏡の皖江博物館類も近い関係にあるだろう（2世紀後葉に定点⁽¹⁰⁾）。華西系移転時期（2世紀後半～3世紀前葉の間のいずれか）以降に和泉黄金塚古墳類、続いて泉屋博古館M20類などの製品が作られ、何らかのかたちで上方作系獸帶鏡の製作者が生産に関与した。最も新しい製品は山東民間蔵鏡163類の求心式神獸鏡と考えられ、時期は三国時代初頭に下る可能性がある。現状では、ここで二つに細分した「上方」は龍氏・三羊と華西といった由来の違いや、上方作神獸鏡の紋様など比較から異なる工房と考えている。

徐州北部系は漢鏡7期に創作され、上方銘以外の浮彫式獸帶鏡を手本としていることから、銘文Kbの浮彫式獸帶鏡の製作が先行すると考えられる。何らかの契機に本稿で対象とした上方作系獸帶鏡の獸帶鏡系列が継続的に生産され、画像鏡系列は近い関係で製作にあたった。本稿では生産の後半に神獸鏡系列が位置づけられる可能性を指摘しており、上方作系獸帶鏡の製作者集団はこの段階に前後して上方作神獸鏡の和泉黄金塚類や斜縁神獸鏡の生産に転じていったと考える。

上方銘をもつ鏡を概観したが同じ徐州地域内に南北の差を見出した。研究史でふれた森下の系統差を反映しているだろう〔森下2007・2011〕。また、漢鏡7期には淮北で袁氏作系画像鏡・斜縁神獸鏡を製作した袁派と、淮南で画紋帯神獸鏡を製作した劉派とを分ける見方もあり〔岡村2017〕、漢鏡7期の上方銘をもつ鏡もこれに対応すると考える。

上方作系獸帶鏡生産の実態 最後に、「上方」がどのように活動していたか考察するが、同じ工房の可能性が高く数量が担保されている上方作系獸帶鏡に焦点を絞る。比較対象として、袁氏作系画像鏡の製作者は「袁氏」・「銓氏」などがおり、製品の現存数（30面弱）から二桁に満たない程度の人数で操業していたとされる〔森下2014〕。「袁氏」らの作鏡姿勢は袁氏作系画像鏡を作り続け、神獸鏡の影響も限定的である。移動することもなく、家内制手工業のような様相をみせる。本稿で対象とした上方作系獸帶鏡は50面前後であるが、銘文が判読不能なものや鏡片のうち本稿の対象に含められそうな事例を合わせると90面前後になるため、工房の規模は袁氏と比べるとかなり大規模であったか長期にわたる生産だった可能性がある。

なぜ上方作系獸帶鏡を作りはじめたか考古学的に証明することは難しいが、後に続く斜縁神獸鏡も日本列島から多く出土することをふまえると、上方作系獸帶鏡の段階で既に日本列島側の需要に応えた作鏡者集団があらわれたのだろうか。上方作系獸帶鏡は同時代の他の鏡と比べると浅い浮彫で、彫り下げた部分に施す細線も少ない。内区には余地も多く、鏡作りにかかった労力が少ない印象を受ける。見方によれば簡略な鏡を作り続ける量産志向をみてとれ、これは日本列島への輸出を意識した解釈の説明になり得るだろう。大陸における日本列島への指向は上方作系獸帶鏡に続く斜縁神獸鏡、製作地論争はあるがさらには三角縁神獸鏡へと繋がり、上方作系獸帶鏡は最も早い段階に位置づけられる資料として重要だと考える。

おわりに

上方作系獣帯鏡が抱える問題をこれまでとは異なった観点から検討してみた。本稿の特徴は上方銘をもつすべての鏡を対象にしたことにある。上方銘に資料を限定したため、浮彫式獣帯鏡との関係や、頻繁に登場した「三羊」にまでは手が回らなかった。しかし、資料を集めると上方作神獣鏡がこれほど多いことに驚かされ、結果的に研究史で問題になっている上方作系獣帯鏡と画紋帯神獣鏡の関係を中心に論じることとなった。上方作系獣帯鏡と上方作神獣鏡の間には時期差を想定したが、徐州で作られた吾作画紋帯神獣鏡の位置づけは不問としたため、研究史でとりあげた論争の解決には至らなかった。現状では系統差が有力と考えている。また、本稿は工房の動態を焦点にしたため、日本列島内での鏡の扱い方については言及しなかった。

新たな問題提起と本稿をたたき台にして、この時期の銅鏡・古墳研究が次のステップに進むことがあれば、本稿を奏した甲斐があったと思う。

注

- (1) 漢鏡編年の主な時期と鏡式は以下の通り。鏡式は本稿とかわるもの限定した。
漢鏡 5 期（後漢前期、1 世紀中頃～後半）：盤龍鏡・浮彫式獣帯鏡
漢鏡 6 期（後漢中期、2 世紀前半）：画像鏡・小型の盤龍鏡
漢鏡 7 期（後漢後期、2 世紀後半～3 世紀初め）：第 1 段階：上方作系獣帯鏡・飛禽鏡・袁氏作系画像鏡など画像鏡の一部、
第 2 段階：画紋帯神獣鏡、第 3 段階：斜縁神獣鏡
- (2) 上方作系獣帯鏡の研究史と問題点については拙稿でまとめたので参考にされたい [馬淵 2019]。
- (3) 例えば、輪郭線をもたない銘文 Kb の獣帯鏡や、輪郭線をもたない四獣鏡のうち上方作系獣帯鏡に凶像が似るものは、上方作系獣帯鏡に含められてきたが、本稿では上方作系獣帯鏡の検討から除外している。
- (4) 本稿で使用した林分類のうち、変更前のものを示しておく。改変には樋口隆康の分類 [樋口 1979] を参照した。
Kb：尚方作竟真大巧 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食棗 浮由天下敖三下海 徘徊名山採芝草 寿如金石之天保
Pb：尚方作竟自有紀 辟（除）去不羊宜古市 上有東王父西王母 令君陽遂多孫子（令人長命不知老）
P 短：某氏作竟自有紀 辟（除）去不羊宜古市
Pd：某氏作竟自有紀 青龍白虎居左右 …
Qa：尚方作竟佳且好 明而日月世少有 刻治今守悉皆在（長保二親宜孫子）
S 短：吾作明竟 幽凍三商 …
W：某氏作竟自有道（紀） 明而日月世少有（刻治今守悉皆在） …
X：上方乍竟真大工 青龍白虎在左右 宜子孫
なお、W は P と Qa の合成銘文で、X は上方作系獣帯鏡の銘文として位置づけた。
- (5) 袁氏作系画像鏡との比較から辟邪をモチーフにした凶像と判断した。首から身体にかけて U 字に曲げて後ろを振り返る獣像が相当する。
- (6) 鏡の大部分を欠損しており銘文型式が特定できなかったため、銘文一覧表には表記していない。
- (7) 上野は同じ三羊系でも盤龍鏡を漢鏡 6 期、画像鏡を漢鏡 7 期に位置づけ、時期的なずれが発生していることに言及している [上野 2003]。
- (8) 画紋帯環状乳神獣鏡で上方銘が共通する製品が存在することは村瀬陸が着目している [村瀬 2016]。
- (9) 出土地不明資料のうち、所蔵する博物館の位置をふまえても大きな差はない。
- (10) 特殊な例なので参考程度にしておきたいが、中平二年（185）尚方作画像鏡が存在しており [王綱懷 2015・53 頁]、向かい合った神仙の間に珠点を充填することや、獣像表現は三羊系に類似することは絶対年代の手がかりとなる。

参考文献

- 岩本 崇 2017 「北和城南古墳出土品の調査 鏡」『北和城南古墳出土品調査報告書』奈良国立博物館
- 岩本 崇 2019 「伯耆国分寺古墳に副葬された鏡の履歴」『伯耆国分寺古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会
- 上野祥史 2000 「神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』第 83 卷第 4 号
- 上野祥史 2001 「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第 86 卷第 2 号
- 上野祥史 2003 「盤龍鏡の諸系列」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 100 集
- 上野祥史 2005 「鏡の生産と流通からみた四川をめぐる地域間関係」『四川省における南方シルクロード（南伝仏教の道）の研究』シルクロード学研究 24、シルクロード学研究センター研究紀要
- 岡村秀典 1992 「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る』出雲古墳研究会
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獸鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66 吉川弘文館
- 岡村秀典 2010 「漢鏡 5 期における淮派の成立」『東方學報』京都第 85 冊
- 岡村秀典 2012 「後漢鏡における淮派と呉派」『東方學報』京都第 87 冊
- 岡村秀典 2013a 「名工杜氏伝—後漢鏡を変えた匠」『技術と交流の考古学』同成社
- 岡村秀典 2013b 「漢三国西晋時代の紀年鏡 —作鏡者からみた神獸鏡の系譜—」『東方學報』京都第 88 冊
- 岡村秀典 2017 『鏡が語る古代史』岩波書店
- 岸本直文 2011 「後王権形成と鏡」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』香芝市二上山博物館
- 実盛良彦 2015 「上方作系浮彫式獣帯鏡と四乳飛禽鏡の製作と意義」『FUSUS』VOL. 7
- 辻田淳一郎 2001 「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』第 46 集
- 下垣仁志 2011 『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 「中国古鏡の研究」班 2011 「後漢鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 冊
- 林 裕己 2006 「漢鏡銘について（漢鏡銘分類概論）—樋口分類補正試論—」『古文化談叢』第 55 集
- 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
- 福永伸哉 2001 「画文帯神獸鏡と邪馬台国政権」『東アジアの古代文化』108 号
- 馬淵一輝 2019 「華北東部の銅鏡をめぐる諸問題」『銅鏡から読み解く 2～4 世紀の東アジア 三角縁神獸鏡と関連鏡群の諸問題』アジア遊学 237、勉誠出版
- 馬淵一輝 2022 「斜縁神獸鏡の系譜—考古学的手法と字形分析を中心に—」『古文化研究』第 21 号
- 村瀬 陸 2016 「漢末三国期における画文帯神獸鏡生産の再編成」『ヒストリア』259 号
- 村瀬 陸 2019 「画文帯神獸鏡の生産」『銅鏡から読み解く 2～4 世紀の東アジア 三角縁神獸鏡と関連鏡群の諸問題』アジア遊学 237、勉誠出版
- 森下章司 2007 「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』第 54 卷第 2 号
- 森下章司 2011 「漢末・三国西晋鏡の展開」『東方學報』京都第 86 冊
- 森下章司 2012 「華西系鏡群と五斗米道」『東方學報』京都第 87 冊
- 森下章司 2014 「後漢鏡製作工房の一形態」『古墳出土品がうつつ出す工房の風景—手工業生産の実像に迫る—』大阪大谷大学博物館報告書第 61 冊
- 森下章司 2016 『五斗米道の成立・展開・信仰内容の考古学的研究』平成 24～27 年度科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 研究成果報告書、大手前大学総合文化学部

報告書・図録等

【日本】

- | | |
|--------------------|---|
| 群馬新田町赤堀（宮田稲荷古墳） | 車崎正彦編 2002『考古資料大観』第5巻 弥生・古墳時代 鏡、小学館 |
| 群馬矢場薬師塚古墳 | 東京国立博物館編 1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅱ）、便利堂 |
| 長野弘法山古墳 | 斎藤忠編 1978『弘法山古墳』松本市教育委員会 |
| 長野中山36号墳 | 原嘉藤・小松虔 1972「長野県松本市中山第36号古墳（仁能田山古墳）調査報告」『信濃』第24巻第4号 |
| 愛知笹ヶ根1号墳 | 愛知県史編さん委員会編 2005『愛知県史』資料編3 考古3 古墳 |
| 京都百々池古墳 | 西田直二郎・梅原末治 1920「川岡村岡ノ古墳」『京都府史跡勝地調査会報告』第二冊、京都府 |
| 伝京都石不動古墳 | 奈良国立博物館 2017『北和城南古墳出土品調査報告書』 |
| 大阪安威0号墳 | 茨木市教育委員会編 1990『わがまち茨木 古墳編』茨木市教育委員会 |
| 大阪和泉黄金塚古墳 | 末永雅雄・嶋田暁・森浩一編 1954『和泉黄金塚古墳』綜藝舎 |
| 大阪交野東車塚古墳 | 奥野和夫・小川暢子編 2000『交野東車塚古墳（調査篇）』交野市埋蔵文化財発掘調査報告 1999- I |
| 兵庫塚ノ元古墳 | 兵庫県史編纂委員会編 1992『兵庫県史』考古資料編 |
| 鳥取石州府29号墳 | 米子市史編さん協議会編 1999『新修米子市史』第7巻 資料編 考古 原始・古代・中世 |
| 鳥取桂見2号墳 | 船井武彦ほか編 1984『桂見墳墓群』鳥取市文化財調査報告書 18 |
| 岡山吉原6号墳 | 草原孝典 1997「吉原6号墳」『古代吉備』第19集 |
| 広島中小田1号墳 | 潮見浩編 1980『中小田古墳群—広島県高陽町所在—』広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室 |
| 広島馬場谷2号墳 | 植田千佳穂編 1993『ひろしまの青銅器』広島県立歴史民俗資料館 |
| 広島池の坊古墳 | 同上 |
| 広島蔵王原古墳 | 村上正名 1959「備後芦田川下流域の古墳群」『古代吉備』第3集、古代吉備研究会 |
| 徳島西山谷2号墳 | 原芳伸編 2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第62集 |
| 香川石清尾山猫塚古墳 | 梅原末治 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第12冊 |
| 香川今岡古墳 | 松本敏三・岩橋孝編 1983『讃岐青銅器図録』瀬戸内海歴史民俗資料館 |
| 愛媛妙見山1号墳 | 下條信行編 2008『妙見山一号墳—西部瀬戸内における初期前方後円墳の研究—』報告・論考編、真陽社 |
| 佐賀中原遺跡 SP13231 木棺墓 | 小松譲編 2012『中原遺跡VI 12区・13区の古墳時代初頭前後の墳墓群の調査』佐賀県文化財調査報告書第193集 |
| 大分古稲荷所在石棺（宇佐宝鏡寺） | 綿貫俊一 2013「中之原古稲荷出土の斜縁神獸鏡」『大分県立歴史博物館研究紀要』14 |

【朝鮮半島】

南井里 116 号墳 (彩篋塚)	小泉顕夫・澤俊一 1934『楽浪彩篋塚』朝鮮古跡研究会
大同江面石巖里 (多田春臣旧蔵)	関野貞ほか 1925『楽浪郡時代ノ遺蹟』朝鮮総督府 No.1322 (略称:楽浪郡)
大同江面石巖里 (京都大学総合博物館蔵)	東洋文庫梅原考古資料画像データベース
大同江面 (関口半旧蔵)	関野貞ほか 1925 No.1330
伝楽浪 (寺師見國旧蔵・黎明館蔵)	東洋文庫梅原考古資料画像データベース
伝楽浪 (柴田鈴三旧蔵)	梅原未治・藤田亮策 1959『朝鮮古文化総鑑』第3巻、養徳社

【中国】

遼寧大連市甘井子区前牧城驛漢墓	旅順博物館編 1997『旅順博物館蔵銅鏡』文物出版社 No.45 (略称:旅順)
安徽舒城県棠樹郷寒塘村	安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 2008『六安出土銅鏡』文物出版社 No.95 (略称:六安)
安徽寿県茶庵馬家古堆東漢墓	安徽省文化局工作隊・寿県博物館 1966「安徽寿県茶庵馬家古堆東漢墓」『考古』第3期
山東臨淄永流墓地金鼎緑城三期工地 M763	淄博市臨淄区文物管理局 2017『山東臨淄戦国漢代墓葬与出土銅鏡研究』文物出版社
山東臨淄車站墓地淄博七中工地 M3	同上
山東省昌邑市辛置村 M885	山東省文物考古研究院・昌邑市博物館 2021『昌邑辛置—2010～2013年墓葬発掘報告』文物出版社
伝河南省	梁上椿 1940～1941『巖窟蔵鏡』No.349 (略称:巖窟)
湖北仙桃市沔陽県	姚高悟 1989「湖北沔陽出土の漢代銅鏡」『文物』第5期
湖北鄂州市鄂鋼防空洞古墓	鄂州市博物館 2002『鄂州銅鏡』中国文学出版社 No.88 (略称:鄂州)
湖北鄂州市西山	同上 No.98
湖北雲夢県周田癩痢墩 1 号墓	湖北省孝感市博物館編 2014『孝感銅鏡』武漢大学出版社 No.47 (略称:孝感)

【その他】

會津八一記念博物館蔵	早稲田大学會津八一記念博物館編 2008『服部コレクション 鏡の世界』No.223・321 (略称:服部)
和泉市久保惣記念美術館蔵	久保惣記念美術館編 1985『和泉市久保惣記念美術館 蔵鏡図録』No.53
大阪歴史博物館蔵	大阪市立博物館編 2001『中国古鏡 I 附/古墳時代の鏡 一館蔵鑑鏡資料 3 -』大阪市立博物館 館蔵資料集 28 No.36 (考 589)
学習院大学蔵 林裕己	学習院大学国際研究教育機構編『学習院大学蔵中国銅鏡図録 林コレクション』No.75
古鏡の美	小窪和博 1987『古鏡の美』朝日新聞名古屋本社編集制作センター No.48・53
泉屋博古館蔵	廣川守・山本堯編 2018『泉屋博古 青銅鏡』泉屋博古館 M20・106
中国古鏡図説	川村宗嗣 1978『中国古鏡図説』東北出版企画 C27・28
東京大学蔵 関野雄	雨宮健祥 2021「関野雄コレクションに含まれる青銅鏡群の紹介」『東京大学考古学研究室紀要』第34号 CL.Y19-22
東北歴史博物館蔵 杉山寿栄男	東北歴史博物館編 2004『杉山コレクション 古墳時代関係資料図録』No.38

西川 2000	西川寿勝 2000『三角縁神獸鏡と卑弥呼の鏡』学生社 図 3C・24
常任峽蔵	樋口隆康 1957「新中国で着目した漢六朝鏡」『考古学雑誌』第 43 卷第 2 号
陳介祺旧蔵	陳介祺 1925『簠齋藏鏡』十左
	辛冠潔 2001『陳介祺藏鏡』文物出版社 No.111・112・113・118・120・141・142 (略称：陳介祺)
中平二年鏡	王綱懷編 2015『中国紀年銅鏡 兩漢至六朝』上海古籍出版社
銅華清明	劉軍 2014『銅華清明 光照千秋—清愛堂藏鏡』文物出版社 No.118
金石索	馮雲鵬・馮雲鶴 1821『金石索』6 卷上方吉陽竟・上方赤松子竟
嵩雲居	不明『嵩雲居藏鏡』
小校経閣金文	劉體智 1935『小校経閣金文拓本』15 卷 35・36 (略称：小校)
徐乃昌旧蔵	徐乃昌著、末永雅雄・杉本憲司編 1983『徐乃昌蔵中国古鏡拓影(影印本)』木耳社 No.79
遼寧旅順博物館蔵	旅順博物館編 1997 No.77
安徽省寿県博物館蔵	安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 2008 No.121
安徽省皖江博物館蔵	同上 No.84
安徽省皖江	安徽省文物考古研究所・銅陵市文物管理局編 2010『皖江漢魏銅鏡選粹』黄山書社 No.140 (略称：皖江)
浙江省博物館蔵	王士倫編・王牧修訂 2006『浙江出土銅鏡(修訂本)』文物出版社 No.47 (略称：浙江)
山東省博物館蔵	魯文生編 2004『山東省博物館蔵珍』銅鏡卷、山東文化音像出版社 No.36
山東民間蔵鏡	張道来・魏傳來 2006『山東民間蔵鏡』齊魯書社 No.163
山東東平県博物館蔵	馬天成・邢琪・孫穎 2021「泰安地区館蔵歴代銅鏡選介及研究」『文物天地』第 4 期
山東章丘市博物館蔵	山口県立萩美術館・浦上記念館編 2005『鏡の中の宇宙』シリーズ山東文物 6
湖北雲夢県博物館蔵	湖北省孝感市博物館編 2014 No.50
陝西省博物館蔵	王趁意 2011『中原藏鏡聚英』中州古籍出版社 附 No.7 (略称：中原)
ハルヴィル旧蔵	梅原末治 1931『欧米における支那古鏡』刀江書院 No.104 上 (略称：欧米)

図版出典

- 図 1 岡村 1999
- 図 2 1～4：筆者撮影
- 図 3 1・2：筆者撮影
- 図 4 1：綿貫 2013 2：奈良県立橿原考古学研究所編 2006『3次元デジタルアーカイブ 古鏡総覧』 3：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>) 4：筆者撮影
- 図 5 1～4・6：筆者撮影 5：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)
- 図 6 1：辛冠潔 2001・141 2：小窪和博 1987・53 3：安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 2008・121 4：筆者撮影
- 図 7 1：奈良国立博物館 2017 2・4：深井淳氏撮影・泉屋博物館提供 3：張道来・魏傳來 2006・163 5：安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 2008・84 6：劉體智 1935 15 卷 36 表上
- 図 8 筆者作成

表1～5 筆者作成

謝辞

本稿の前半は2014年に同志社大学に提出した卒業論文を大幅に改稿したものである。諸般の事情のため修正して発表することは遅れたが、この論文は多くの方々との議論や助言がなければ、かたちになることはなかった。一人一人名前を挙げることはできないが、関係者の方々には感謝申し上げたい。

なお、資料調査では下記の機関のお世話になった。末筆ながら記して感謝申し上げます。

和泉市久保惣記念美術館 磐田市教育委員会 大阪歴史博物館 学習院大学国際研究教育機構 交野市教育委員会

唐津中原文化財調査事務所 京都国立博物館 京都大学総合博物館 泉屋博古館 徳島県立博物館

名古屋市博物館 広島大学文学部考古学研究室 松本市立考古博物館 鹿児島県歴史・美術センター黎明館

早稲田大学會津八一記念博物館

本稿は平成28～31年度日本学術振興会特別研究員奨励費「後漢後期における銅鏡の製作系統と流通に関する研究」(課題番号16J09093)、平成27年度高梨奨学基金若手研究助成「日本出土の後漢後期鏡とその製作系統—徐州系鏡群を中心に—」の成果の一部である。